

呼吸器外科について



呼吸器外科 医長 石川 祐也



はじめに

呼吸器外科は肺癌に代表される様々な胸の中のできものを手術による治療で取り除き、病状の改善を目指す科です。皆さまが無意識に行っている「呼吸」に必要な気管・気管支(空気の通り道)や肺(空気を溜める臓器)を主な対象とし、その切除や再建(必要なだけ取り除き、時に作り直すこと)を主に行います。当科は2022年4月から常勤1名、非常勤1名の2名体制で新たに診療をスタートしました。呼吸器疾患の診断や薬での治療を得意とする呼吸器内科の先生方と協力し、患者さん一人一人の正しい病状の把握とそれに見合った治療を提供できるよう、日々取り組んでいます。今回は、呼吸器外科手術という広い

テーマの中でも、進歩が続く「手術アプローチ」に焦点を当ててみたいと思います。

胸腔鏡手術というアプローチ

古くは外傷や結核など感染症の外科治療に端を発し、今では肺癌の外科治療や肺移植まで診療の幅を広げてきた呼吸器外科ですが、昔から大きな傷で胸部を開いて行われる開胸手術が主流でした。これは外科医の肉眼で対象の病変や臓器を見ながら、直接手が入る状況で実施される安全性の高い手術ですが、時に20cmを超えるその傷の大きさゆえに手術の後の痛みや体への負担が大きく、かねてより負担の少ない、いわゆる低侵襲な手術の方法が模索されてきました。2000年に肺癌に対する胸

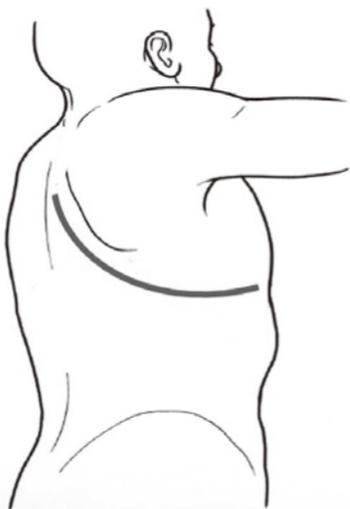
腔鏡手術が保険適用になって以後、ビデオモニターの映像を通して実施される傷の小さな胸腔鏡手術の割合が増え続けており、2020年の日本胸部外科学会のアンケート調査では肺癌手術の約70%が胸腔鏡手術で実施されているという結果でした。胸腔鏡手術では触診や立体把握が難しいなどの欠点がありますが、傷の小ささや痛みの少なさのみならず、拡大視が可能などの技術的な利点もあります。胸腔鏡手術における傷の大きさやその個数はしばしば実施施設や対象疾患による違いがありますが、低侵襲な手術が全国的に普及しています。

新たなアプローチ -単孔式胸腔鏡手術とロボット支援手術-

近年、単孔式手術と呼ばれる4cm以

下の傷ひとつで行われる胸腔鏡手術やロボットを用いて複数の小さな傷(通常、数cmの傷4つか5つ)で行われるロボット支援下胸腔鏡手術など、一口に胸腔鏡手術と言ってもいくつかのバリエーションが生じ、今なお進歩を続けています。2010年頃から本邦に導入されたIntuitive Surgical社の手術支援ロボットda Vinci(ダヴィンチ)の名前は皆さまも耳にしたことがあるのではないのでしょうか。2018年より呼吸器外科領域のロボット手術の保険適用が認められるようになり、全国で毎年2000例を超えるロボット手術が行われています。このような手術アプローチにおける潮流を踏まえ、当科においても単孔式胸腔鏡手術導入に向けた手術トレーニングを実施しておりますが、手術の安全性や確実性を損なわずに患者さんの負担を軽減することに配慮し、現状では数センチの傷を複数個使用することが多いです。

開胸手術(後側方切開)



ロボット手術/通常の胸腔鏡



単孔式手術



おわりに

最後まで御覧いただきありがとうございます。当院での手術症例数はまだ少ないですが、連携関係にある東京医科歯科大学病院呼吸器外科に協力を要請しつつ、診療を進めております。埼玉東部地区の呼吸器外科診療の一翼を担えるよう、引き続き努力して参ります。